バッハとヘンデルにおける「宗教」と「世俗」

大角 欣矢◇*Kinya Osumi*［東京藝術大学音楽学部楽理科教授］

1685年、中部ドイツのザクセン＝テューリンゲン地方に、音楽史に不滅の足跡を残した二人の人物が相次いで誕生した。2月23日、ハレでゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルが、そしてそのほぼ1ヶ月後の3月21日、ハレから直線で120キロ余りしか離れていないアイゼナハで、ヨハン・ゼバスティアン・バッハが、どちらも伝統的なルター派の家庭に生まれ、育って行った。そして、バッハは9歳で両親を、ヘンデルは11歳で父を亡くし、二人とも独立独歩の精神で人生を切り拓いて行く。どちらも早くから才能を顕し、若くして――ヘンデルは17歳、バッハは18歳で――教会オルガニストの地位に就いたこともよく似ている。しかし、そこから先は大きく異なっている。バッハは教会オルガニストから宮廷オルガニスト、宮廷楽師長、宮廷楽長、トマス・カントル、と着実にステップアップを重ねつつも、常に中部ドイツの狭い圏内にとどまり、その名声も生前は広くドイツ圏外に及ぶことはなかった。ヘンデルは、1年で地元のオルガニストの職を離れ、当時のドイツで最も進歩的な国際都市ハンブルクへ、そしてイタリアへ、さらに最終的に安息の地となったイギリスへと雄飛し、その名声はヨーロッパ中にとどろいた。

活躍の分野でも、二人は大きく異なっていた。二人とも、生涯を通じてオルガン演奏（特に即興）の技術によって名声を博していたが、多くのオルガン作品を残したバッハに比べ、ヘンデルは――オラトリオの幕間に演奏するための小型オルガン用の協奏曲を別とすれば――オルガン作品を全く残さなかった。ヘンデルのチェンバロ曲や室内楽曲、管弦楽曲はそれなりの数に上り、中には非常に有名になったものもあるが、全体として見るならばそれらは片手間仕事に過ぎない。むしろ、彼が生涯にわたり心血を注いだジャンルは何と言ってもオペラである。その数は何と42曲に上る。ある時期以降、興行上の理由でオペラから手を引き、オラトリオに方向転換し（数え方により異なるが少なくとも）23曲を残したが、彼の最大の関心事がオペラにあったことは疑いなく、生前、彼は自他共に認める「オペラ作曲家」であった。

バッハはどうだろうか。彼はオペラを1曲も残さなかった。その器楽作品の密度の濃さを考えると、彼がそこに傾けた精力は疑うべくもないが、量的な面から言えばやはり200曲にも及ぶ教会カンタータを始めとする宗教作品が圧倒的な存在感を放っている。「世故に長けた」企業家ヘンデルに対し、バッハは、敬虔に、愚直に、教会音楽家としての使命を全うした、そうした語り口は我々にはおなじみのものである。しかし、宗教がなおも社会生活のあらゆる面で揺るぎない基盤をなしていた時代の営みを、「宗教vs世俗」という近代的な対立図式にあてはめてしまうことには注意深くあらねばならない。

例えば、バッハ当時のライプツィヒでは、教会の座席の使用権は高値で売買されたり、相続・贈与される資産であった。カンタータ入りの主要礼拝に座って参加できたのは裕福な人々のみで、なんと富裕層向けのボックス席まであったというから驚きである。万人に開かれた教会

SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie